

%にすぎない。貧血、浮腫は両世帯の間にあまり差はないが、毛孔性角化症は5～24歳頃までは生産者世帯では6%前後に発現しているが消費者世帯では3～4%となつている。

前年と比較すると、生産者世帯では口角炎、浮腫が昨年より若干増加し消費者世帯では貧血がふえているほかは全般的に減少している。

次に5月調査における消費者世帯を細分した調査結果についてみると、前年と著しい増減はないが、各世帯を通じて貧血がやや増加し、はい腸筋圧痛は減少している。

第35表 身体症候の業態別発現率

	生産者世帯		消費者世帯		その他の世帯	
	32年	33年	32年	33年	32年	33年
	%	%	%	%	%	%
有 症 率	30.8	29.2	22.0	20.9	29.7	27.2
貧 血	3.4	2.7	2.0	2.6	2.9	3.8
口 角 炎	9.5	9.8	4.0	3.8	7.9	7.3
毛孔性角化症	4.2	4.2	2.9	3.0	4.9	4.8
けん反射消失	12.1	10.6	9.4	8.8	11.3	8.3
はい腸筋圧痛	7.2	6.5	5.8	4.9	7.8	5.8
浮 腫	2.4	3.0	2.7	2.6	3.1	3.2

第36表 身体症候の業態別発現率

(消費者世帯細分・33年5月)

	事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯
	%	%	%	%
	有 症 率	23.1	20.5	26.4
貧 血	2.5	2.3	4.4	3.6
口 角 炎	3.4	3.3	6.2	4.0
毛孔性角化症	3.0	2.8	4.5	3.3
けん反射消失	10.2	9.7	10.5	11.2
はい腸筋圧痛	6.5	4.4	5.5	3.9
浮 腫	3.7	2.4	2.7	2.8

有症率をみると食糧消費水準の高い常用勤労者世帯が最も少く20.5%であるが、粗悪な食生活をしている日雇・家内労働者世帯は26.4%と発現率は高く、その他の世帯がこれに次いでいる。また日雇・家内労働者世帯ではB₂欠乏症候が多発し、その他の消費者世帯ではB₁欠乏症候が多発している。

5. 体 位

終戦前後に著しく低下した国民の体位は、食糧消費水準の向上や、生活環境の平常化等に伴い急速に回復の道を辿り、おおむね、昭和27～28年頃には、戦前の水準にまで復し、さらにその後も引続き着実な足どりをみせて向上してきた。しかし、ここ1～2年体位の向上は、やや停滞的な傾向がみられ、栄養摂取水準の停滞などと相俟つて、現状のままでは、回復期に示した傾向にみられるような明るい日本人の体位に十分な期待を寄せることはできないようにも考えられる。

1) 養育の年次推移

国民栄養調査に伴う体位の計測は戦後の昭和22年に始まつており、従つて戦前の青少年の体位を知る唯一の統計は文部省が明治33年来実施してきた学校衛生統計によるほかない。いま、ここに文部省の学校衛生統計の示す数値によつて明治以降の国民体位の長期にわたる変遷のあとをふりかえつてみよう。

すなわち、明治33年の調査開始以来、保健衛生の進展並びにこれを取りまく社会環境の改善等に伴い、青少年の体位は逐年向上し、おおむね、昭和12～14年頃には、身長、体重など国民の体位はすべて戦前の最高水準を示したが食糧統制のはじまつた昭和15年頃から漸次下降しはじめ、その後は食糧事情の窮迫と生活環境の悪化等の影響を受けて、特に都市に生活する者の体位は急激に低下し、昭和19、20年頃は最悪の状態にたちいたつたとみられるが、遺憾ながら戦時の混乱期のため、すべての統計は不明となり、これを裏付ける数値はない。次いで戦後昭和22年に初めて実施された国民栄養調査によりそれ迄の食糧難を反

映した驚くべき体位の減退が明らかにされ、甚だしいものでは明治33年以前の状態迄逆行していることが判明した。

この間の事情をもつと具体的に考察すると、まず、戦争による被害程度の最も大きかつたとみられる14歳の男子の身長は第37表にみられるとおり明治33年には、147.0cmであり、その後大正8年頃迄にかけては、殆んど変化がなかつたが、大正の後期より昭和の初期にかけて発育向上のあとが目立ち、昭和2年には150.1cmで3.1cmの増加となり、それ以後も引続き順調な上昇を続け昭和12年には上昇の頂点に達し、明治33年より5.0cm高い152.0cmとなつた。昭和15年から22年までの統計はないが、昭和22年にこれが143.8cmにまで低下し、文部省の学校衛生統計が始まつた明治33年より更に3.1cm低く、丁度昭和7年頃の13歳の者と同じ体位を示した。

なおこの傾向は、性別、年齢別により若干の差異はあるが一般に男子の被害程度が著しく、女子の方が軽いようである。例えば同じ14歳の年齢でも戦前は男子が女子より、おおむね3cm以上の差で優位を占めていたのに、昭和22年には男子143.8cm、女子144.0cmと殆んど同一値にまで低下した。しかし、回復の進むにつれて再び男女の差は漸次拡大し、昭和33年には、3.3cmの差で男子の発育の方がまさるようになった。

第37表

身長発育の年次推移

単位=cm

年度 年齢 (才)	文 部 省 学 校 衛 生 統 計				国 民 栄 養 調 査			
	明治33年	大正2年	昭和2年	昭和12年	昭和22年	昭和28年	昭和33年	
男	6	107.0	106.7	108.0	108.8	107.1	108.8	110.3
	7	110.9	111.2	112.8	114.2	111.8	114.3	115.8
	8	116.1	116.1	117.8	119.1	116.2	118.2	120.9
	9	120.0	120.3	122.4	123.6	121.5	123.4	125.4
	10	123.9	125.2	126.8	128.2	125.5	128.5	130.2
	11	127.9	129.1	131.1	132.8	129.7	133.0	134.4
	12	133.9	133.9	136.8	137.7	133.6	137.4	139.2
	13	140.0	140.0	143.4	143.9	138.6	143.1	146.4
	14	147.0	147.3	150.1	152.0	143.8	149.8	152.7
	15	152.1	153.6	155.5	157.2	150.3	155.8	157.5
16	156.1	157.6	158.4	160.1	155.6	158.4	160.8	
女	6	104.8	105.2	106.9	107.9	106.0	107.8	109.2
	7	110.0	110.0	111.3	112.9	110.8	114.0	114.6
	8	113.9	114.5	116.2	118.0	115.7	118.8	119.7
	9	119.1	119.1	120.9	122.7	120.5	123.5	125.1
	10	123.9	123.6	125.7	128.1	125.5	128.5	129.9
	11	127.9	128.8	131.1	132.8	129.9	134.0	136.2
	12	133.0	134.8	138.0	139.7	134.8	139.0	141.3
	13	137.9	140.0	143.3	143.8	139.6	143.5	146.1
	14	143.0	144.5	147.1	148.4	144.0	147.1	149.4
	15	144.8	147.0	148.9	150.2	147.9	149.7	150.6
16	146.1	148.2	149.8	151.0	149.3	150.4	151.2	

また、年齢別にみて最も被害をうけたものは男子では13~15歳で平均7cm程度の低下、女子では12~14歳で平均5cmの低下となつている。これに対し年齢6歳のものでは被害程度も軽く、例えば昭和12年に108.8cmあつた男子の身長は、昭和22年には107.1cmと約1.7cm低下し、年代にして大正8年頃まで逆もどりしたに過ぎない。このように性別、年齢別により被害程度は異るとはいへ、明治時代から長年月を要して年々向上してきた体位を僅か数年の間に一挙にして失つたわけで戦争による被害が如何に大きかつたかを如実に物語つている。

しかし戦後の食糧事情の好転、栄養改善指導、経済力の向上、体育の普及、学校給食の普及、生活環境の改善等種々な要因の向上と相俟つて、戦争中にうけた青少年層の発育欠陥は逐年急速に回復し、おおむね戦前の水準を上廻るようになつたが、その回復程度は性、年齢によりかなり相違し、おおむね、男子よりも女子

第38表 戦前の標準体位

年 令	男		女	
	身 長 (cm)	体 重 (kg)	身 長 (cm)	体 重 (kg)
新生児	50.2	3.05	49.3	2.97
0才	64.7	6.7	63.7	6.4
1	75.9	9.2	74.7	8.8
2	84.5	11.5	83.3	11.0
3	91.3	13.3	90.2	12.8
4	97.5	15.0	96.3	14.3
5	103.1	16.2	102.2	15.8
6	108.8	18.2	107.9	17.6
7	114.2	20.0	112.9	19.4
8	119.1	22.1	118.0	21.4
9	123.6	24.3	122.7	23.6
10	128.2	26.5	128.1	26.1
11	132.8	29.0	132.8	29.4
12	137.7	32.2	139.7	33.7
13	143.9	36.5	143.8	38.3
14	152.4	43.3	148.4	42.0
15	157.0	47.5	150.0	44.5
16	159.5	50.5	150.4	46.5
17	161.0	52.7	150.5	47.5
18	161.7	53.8	151.0	48.0
19	161.8	54.3	151.0	48.2
20	161.9	54.8	150.8	48.3
21~30	161.8	55.5	150.1	48.5
31~40	160.8	56.4	149.0	49.0
41~50	160.0	56.7	148.2	50.0
51~60	159.0	55.7	147.0	48.7
61~	156.5	52.5	144.0	45.5

注) この戦前の標準体位は昭和12~14年頃の日本人としては最も体位のすぐれていた時の資料をもとに厚生省衛生統計委員会の体力および栄養に関する第8専門部会において承認採択されたもので、昭和34年3月までは、国民平均体位基準値として使用していたものである。

の発育が各年令を通じて1～2年早いようである。

次に、昭和24年に国民食糧および栄養対策審議会が決定した、戦前の標準体位（第38表参照）と対比して戦前、戦後の比較および戦後の向上のあとをふりかえつてみよう。なお、この戦前の標準体位は、昭和12～14年頃の日本人としては最も体位のすぐれていた時の身長や体重の統計的資料をもとに補正編さんされたもので、この基準は出所の異なる四種類程の資料をつなぎ合わせて作られたものであるため、そのつなぎ目の前後において（例えば14歳の基準値）若干矛盾があつたのではないかとの見解ももたれているが、戦前に示した最高の体位の水準を示すものとしては最も信頼すべき資料である。

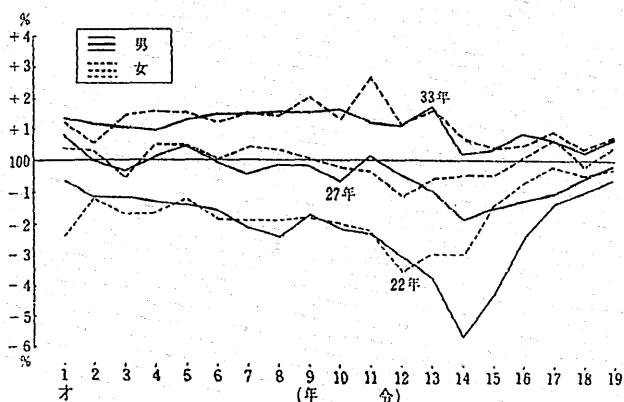
さて、第39表および第10図をみれば明らかなおとおり、男子の身長では戦争によつて最も影響を受けた年令は13～15歳で、戦前の最高水準（基準値）を100とした場合13歳では3.7%、14歳で5.7%、15歳で4.3%低下した。

なお、この低下の程度は2～6歳では1.2～1.6%、7～12歳では1.7～3.0%の低下である。食糧の供給量もかなり改善された昭和25年には3～13歳の年令では、1%前後の線にまで回復したが、14、15歳では依然として(一)3%と回復が遅れている。次に、栄養摂取水準がほぼ、戦前の水準に復したとみられる昭和28年頃には12歳以下の年令では、およそ戦前水準にまで回復し、昭和30年には、0.5～1.0%の範囲で上回つたが、14、15歳の年令では依然として未回復の状態にあつた。昭和33年になると13歳以下の年令で1.0～1.5%上回り、特に、13歳が最も優れ1.7%も伸びているが、14、15歳は僅か0.2、0.3%しか上回つてい

第39表 戦後の身長発育比率の推移 {戦前の最高水準(標準体位)を100とした指数}

年 令	昭 和 22 年		昭 和 28 年		昭 和 33 年	
	男	女	男	女	男	女
才						
1	99.3	97.6	100.7	100.1	101.3	101.2
2	98.8	98.8	100.5	100.0	101.1	100.5
3	98.8	98.3	99.8	100.6	101.0	101.4
4	98.7	98.4	100.2	100.3	100.9	101.5
5	98.6	98.8	100.5	100.7	101.2	101.5
6	98.4	98.2	100.0	99.9	101.4	101.2
7	97.9	98.1	100.1	101.0	101.4	101.5
8	97.6	98.1	99.2	100.7	101.5	101.4
9	98.3	98.2	99.8	100.7	101.5	102.0
10	97.9	98.0	100.2	100.3	101.6	101.4
11	97.7	97.8	100.2	100.9	101.2	102.6
12	97.0	96.5	99.8	99.5	101.1	101.1
13	96.3	97.1	99.4	99.8	101.7	101.6
14	94.3	97.0	98.3	99.1	100.2	100.7
15	95.7	98.6	99.2	99.8	100.3	100.4
16	97.6	99.3	99.3	100.0	100.8	100.5
17	98.7	99.8	99.4	100.8	100.6	100.9
18	99.0	99.5	99.8	100.3	100.2	100.3
19	99.4	99.7	100.4	99.9	100.7	100.7

第10図 身長の前・戦後の発育比率
(戦前の最高水準=100)



では2.6%の増加となつている。

以上述べたのは戦前、戦後の発育の指数についてみたわけであるが、これを更に増減の実数についてみてみよう。第11図は、昭和33年の成績と戦前の体位（基準値）との差を示したもので、昭和33年には戦前からみると、どのくらい身長や体重が増加したかを明らかにしたものである。

すなわち、青少年の体位は各年令層を通じて男女を問わず身長体重とも向上したが、なかんずく、女子の体位の向上は目ざましく、例えば発育盛りの9～13歳の身長の伸びは平均2～3cmに及び、また体重においては14～20歳の者の増加が著しく、男子の平均1kgの増加に対し女子では2kg近く戦前水準を上回っている。

なお、戦後の体位の回復速度は以上のべたとおり極めて著しいものがあつたが、ここ1～2年国民体位の伸びはやや停滞のきざしがみられ、回復期の数年間に示したような急速な伸長率はみられない。

一方国民の栄養状態も食糧消費構造は著しく変化しているとはいえ、栄養素の摂取水準は停滞の傾向をみせており、このままのすう勢を続ける限り体位の向上も大きく期待はできないこととなろう。

2) 昭和33年度の発育状況

次に、昭和33年度の成績について、まず男子の年令別の年間発育量を示すと第12図の如くで、乳幼児の発育は極めて旺盛で0歳から1歳になる間の伸びは12.0cmと約18.5%の増加率であるが、3歳、4歳では6.8cm、6.2cm、5～10歳までは僅かずつ減じているが年間おおむね5cmの増加である。

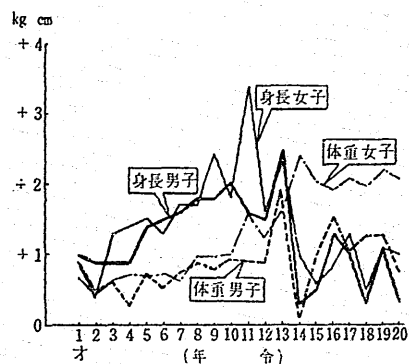
12歳および13歳のいわゆる発育伸長期と呼ばれるときの伸びは乳幼児に次いで高く、最高の12歳と13歳の間の伸びは7.2cmに及んでいるが16歳から伸びは緩慢となり、19歳で発育はおおむね完了する。この傾向は多少の年令のずれはあるとしても体重、上腕囲、胸囲、座高についても大体同様のことがいえる。

次に戦前および戦争直後の昭和22年の各年令別の年間発育量と比較すると第12図のとおり昭和33年の数値は0～1歳の数値が高いこと、4～7歳の間の伸びが大きいこと、発育量の最も大きい年令層（乳児期

ない。

女子の身長についても、男子とほぼ同様な傾向を示しているが、これまでもしばしば述べたとおり、戦争による被害程度は男子より少く、最も低下した12歳の年令でも(-)3.5%で男子よりはるかに少く、また戦前の水準に復帰するのも、各年令を通じて1～2年早くなつている。また昭和33年の発育の現状をみると男子とほぼ同率或はやや上回つた発育を示し、13歳以下の年令層では、いずれも1.5%前後の増加を示しているが、特に11歳の年令

第11図 戦後の発育量（昭和33年）
(戦前の最高水準との差)

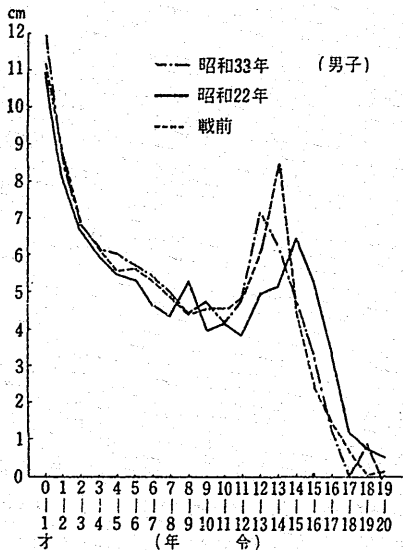


第40表

戦前標準体位に比較した昭和33年の身長・体重発育量

年 令	身 長		体 重	
	男 子	女 子	男 子	女 子
才				
1	+ 1.0 cm	+ 0.9 cm	+ 0.91 kg	+ 0.69 kg
2	+ 0.9	+ 0.4	+ 0.52	+ 0.43
3	+ 0.9	+ 1.3	+ 0.60	+ 0.65
4	+ 0.9	+ 1.4	+ 0.29	+ 0.71
5	+ 1.4	+ 1.5	+ 0.73	+ 0.70
6	+ 1.5	+ 1.3	+ 0.54	+ 0.74
7	+ 1.6	+ 1.7	+ 0.76	+ 0.64
8	+ 1.8	+ 1.7	+ 0.88	+ 0.98
9	+ 1.8	+ 2.4	+ 0.80	+ 0.98
10	+ 2.0	+ 1.8	+ 0.94	+ 1.00
11	+ 1.6	+ 3.4	+ 0.92	+ 1.58
12	+ 1.5	+ 1.6	+ 0.88	+ 1.26
13	+ 2.5	+ 2.3	+ 1.92	+ 1.62
14	+ 0.3	+ 1.0	+ 0.10	+ 2.40
15	+ 0.5	+ 0.6	+ 0.98	+ 2.06
16	+ 1.3	+ 0.8	+ 1.54	+ 1.92
17	+ 1.0	+ 1.3	+ 1.08	+ 2.06
18	+ 0.3	+ 0.5	+ 1.26	+ 1.98
19	+ 1.1	+ 1.1	+ 1.28	+ 2.20
20	+ 0.3	+ 1.0	+ 0.74	+ 2.06

第12図 身長の年齢別年間発育量



を除く)が戦前より1年,昭和22年より2年早くなつて12~13歳の間にみられることである。

なお,昭和22年の増加曲線をみると,13歳以下にあつては8歳に異例のものが認められるほか,すべての年齢において発育量が下回つており,また最も発育の盛んな時期もやや遅れて14歳の時に認められる。

これは,戦時中発育期にあるものが熱量,蛋白質をはじめその他すべての栄養素不足のため十分な発育ができなかつたので,本来ならばもうそんなに発育しない年齢になつてこれを取返えそうとする現象であると考えられる。

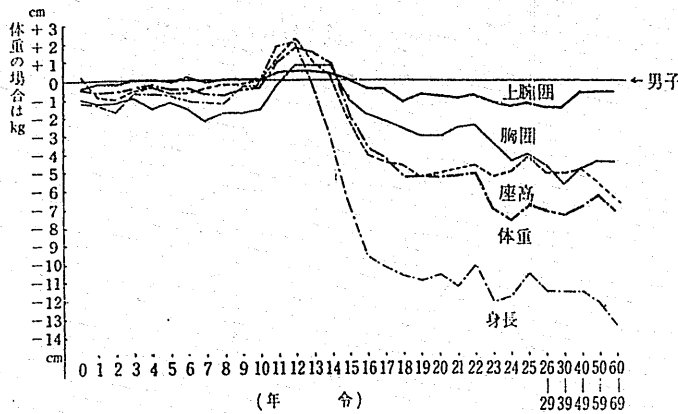
女子の身長の年齢別年間発育量をみると,ほとんど男子と同様な現象がみられ,乳幼児の発育が良くなつたことや発育伸長期が戦前より1年早くなり10歳から11歳の間にみられることである。

ある。

また,女子の身長発育は男子より1~2年早く伸長期をむかえるため11,12歳では第13図にみられるとおり男子の身長を超越しているが,14歳以降は伸びが緩慢になり男子より2年程早い17歳で発育は完了する。

すなわち,女子の身長は8歳以下の年齢では各年齢を通じて1.0~1.5cm男子より劣つているが,9歳,

第13図 女子(a)と男子(b)の発育比較 (a/b)



10歳ではその差が縮まり, 11, 12歳では女子が男子より1.8cm, 2.1cm上回っている。しかし14歳頃から女子の成長は緩慢化するのに対し男子の成長率が急に高まるため14歳で3.3cm, 15歳で6.9cm, 16歳で9.6cmと, それぞれ女子の方が低くなっている。

17歳以上ではその発育差はほぼ固定しおおよね10~12cmの差で男子の方が高い。

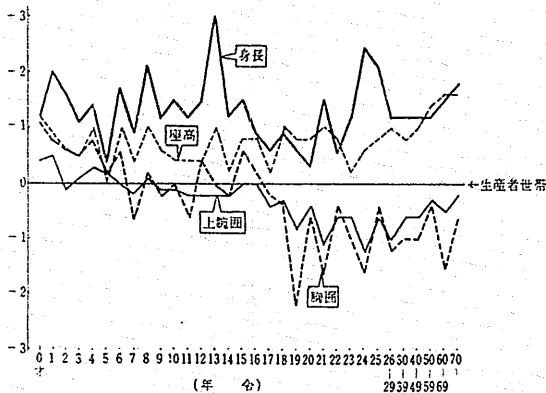
なお, 男子より女子の発育が一時的に優位を示す傾向は体重, 胸围, 上腕围, 座高についてもみられ, 体重, 座高, 上腕围では11~14歳, 胸围では12~14歳において優位を示している。

3) 業態別発育状況

生産者世帯と消費者世帯の身長, 体重の対前年の増減をみると生産者世帯では身長, 体重とも大きな変動はなく停滞的であるというより, むしろ身長では若干低いようであるが消費者世帯では一部の例外はあるとしても身長は6歳で0.6cm, 10歳で1.5cm, 14歳で0.6cmとかなりの向上がみられ, 体重においても6歳で0.43kg, 10歳で0.68kg, 14歳で0.58kg上昇するなど全般に向上のあとがみられる。

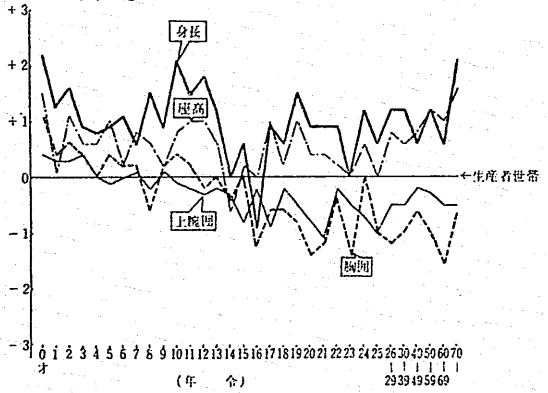
第14図 消費者世帯(a)と生産者世帯(b)の体型比較 (a-b)

男子



第15図 消費者世帯(a)と生産者世帯(b)の体型比較 (a-b)

女子

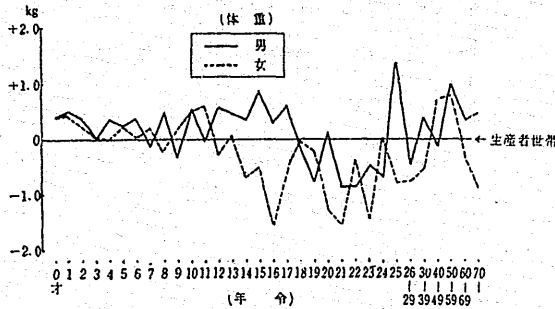


次に生産, 消費の両世帯についてその体型を比較してみると第14, 15図のとおり男女とも身長や座高は消費者世帯の発育がすぐれ, 生産者世帯の方が劣っている。

まず, 身長の発育差についてみると各年齢によつて異なるが消費者世帯は, おおむね1.0~1.5cmの差で生産者世帯より優位にある。なお, 特に差の著しい年齢は男子では13歳の3.0cm, 23歳の2.4cmで, 女子の場合は10, 11, 12歳の年齢で2.0cm程の差がある。

体重では第16図の如く男女で傾向が異なり男子では17歳までは1, 2の例外を除いて消費者世帯が平均0.4~0.6kgの範囲で優位にある。女子の場合は11歳までは, おおむね消費者世帯が優れているが12歳頃から生産者世帯の方が優位を占める。男子の18~29歳までと女子の12~39歳までは, 生産者世帯がすぐれ, その差は年齢により異なるが特に女子の16歳, 21歳, 23歳などでは平均1.5kgも多い。

第16図 消費者世帯(a)と生産者世帯(b)の
体型比較 (a-b)



乳幼児の場合は男女とも消費者世帯が上位を占めるが、小学校の年齢層は不定で特に優劣はつけがたいが、男子の19歳以後、女子16歳以後では年齢により著しい差はあるが、平均 1 cm 程度生産者世帯が上位にある。

以上を要約すると消費者世帯の乳幼児の発育はすべてにおいて生産者世帯よりまさっているが青少年層では身長、座高、体重はすぐれ、上腕囲および胸囲はやや劣っている。生産者世帯では乳幼児、青少年の発育は劣っているが、成人になると胸巾の広い、ずんぐりした体型の人が多く生活条件や環境条件による差異が大きくみられる。

6. 血 圧

日常生活において、われわれの摂取する飲食物がある程度血圧に関係があるということは従来から知られているところであるが、特に近年わが国でも脳卒中による死亡が死亡率の第1位を占めるようになり、食物と高血圧との関係が重要視されるようになってきた。

厚生省では昭和31年以来身体状況調査と合せ、その住民の最高および最低血圧を測定し飲食物が血圧に如何に影響するかを検討した。

性別、年齢階級別の最高、最低血圧の分布をみると第17図の如く年齢の増加とともに最高、最低とも上昇する。例えば5月調査の結果では最高血圧は男子では40~44才前後より上昇をはじめ以後年齢とともにほぼ直線的に増加し、60~64歳で154mmHg、70歳以上では163mmHgに達する。女子では35歳未満では男子より低い平均値を有するが、その上昇は男子より早く35~39歳から上昇を始め60歳までは、ほぼ男子と同様の値を示しているが、60歳以上になると反つて男子を凌ぐようになる。

最低血圧は動脈硬化症の進展に特に関係が深いものと考えられているが、これも最高血圧と同様年齢の増加とともに上昇する。最低血圧の上昇曲線は最高血圧より緩慢であるが、60~64歳では男子で89mmHg、女子で90mmHgとなり、女子ではそれ以後もお僅か

座高は男女を通じて平均0.5~1.0cm程度、消費者世帯が上位にあるが、上腕囲は乳幼児の場合は男女とも消費者世帯が優れ、また男子の6~16歳、女子の4~14歳の年齢では生産、消費の世帯に著しい差はないが、生産者世帯の方が僅かばかり優れ、男子17歳以上と女子15歳以上では0.5~1.0cm程度生産者世帯の方が上位にある。

胸囲の場合もほぼ上腕囲と同じような傾向を示し、

第17図 性別・年齢階級別血圧 (33年5月)

